

第7回リフレッシュとくしまプラン推進委員会議事概要

(開催要領)

1 日 時 平成19年7月24日(火) 14:00～16:00

2 場 所 県庁10階大会議室

3 出席者

委 員	阿部頼孝(敬称略、以下同)	県	飯泉嘉門知事
	伊勢悦子		真木和茂企画総務部長
	井関佳穂理		小森将晴企画総務部次長
	桑原恵		坂東敏行総務課長
	土井五男		安宅恒夫人事課長
	友滝洋子		佐野正孝財政課長
	布川嘉樹		小原直樹新行政体制整備室長
	山下直家		並木俊明上席政策調査員
	若山浩司		

(会議次第)

1 開 会

2 挨 拶

3 議 事

- ・財政改革小委員会の意見書案について
- ・「とくしま未来創造プラン」骨子案について

4 質疑応答

5 閉 会

◇配付資料

資料1 財政改革小委員会の意見書案

資料2 とくしま未来創造プラン骨子案

(議事概要)

(会 長)

現在の地方の非常に厳しい財政状況を踏まえ、新たな行財政改革プラン「とくしま未来創造プラン」につき論議いただきたいと県から提案があった。

小委員会の意見書案、「とくしま未来創造プラン」骨子案ともに骨組みであり、具体的にどう肉付けするかが、非常に重要なポイント。その点を中心に意見をお願いしたい。

(委 員)

資料を見て、徳島の厳しい財政状況がよく分かった。私たち県民にとっても、ただ要求するだけではなく、例えば県と共同してこれができる、といった創意工夫が求められている。また、やはり県の施策と私たち県民の意識が一緒にならなければいけない。

小委員会の意見書に「徳島市の中心部からでも少し足を伸ばせばふんだんに素晴らしい自然が残っている、人間らしい生活の出来るといった利点がある」とあるが、都会でも人間性を失わなければ人間らしい生活。「素晴らしい自然が残っていて人と自然が共生できる」といった表現がいいのでは。他はスムーズに読め、特に11項目の具体的な提案は頭が下がる。あと、「ゼロ予算事業『とくしま“トクトク”事業』」について教えてほしい。

(会 長)

「人間らしい生活」は、誤解を与える余地があるので、この文は検討させていただきたい。「“トクトク”事業」については、事務局から一言お願いしたい。

(県)

以前から、ゼロ予算事業とは名付けないまでも、例えば防災等について地域の皆様を対象に出前講座的なものを行っていたが、今年度からは「とくしま“トクトク”事業」として、大幅に拡充して取り組もうと思っている。県民の方に十分納得していただく特色ある事業という意味で、“トクトク”とした。

内容としては、職員が持つ専門性やノウハウ、民間団体とのネットワークを活かし、例えば、県が防災訓練として実施する図上訓練。災害時にどう動く、被害者をどうするというシミュレーションの内容を市町村にお伝えしたり、新たな予算を伴わない訓練を実施したり。また、県民とともに取り組む美しい町づくり支援事業。これは、県民が行う清掃ボランティア活動等の際に県の産業廃棄物処理協会から廃棄物の運搬に無償の協力をいただく。このほか全部で47事業ある。資料を後でお渡ししたい。

(委 員)

「人間らしい」という表現について、都会でリタイアした人に来てもらえばプラスになるんじゃないか、というところからこういう話になったと思う。

(委 員)

私は、これはいいと思った。地方財政が厳しいのは、国の施策もあるが、基本的には人

口減。定住人口であれ交流人口であれ、大勢の人を呼び込むことが地域の発展に寄与する。最近、スローライフ、ロハスといったライフスタイルの価値が上がっており、徳島にはその条件がある。その意味で、徳島の未来の創造としてこの表現はいいと思った。

これだけ厳しい状況では、聖域を設けず改革しないと成果上がらない。県民一人ひとりが痛みを共有しないと。やはり、実態を情報公開し、理解してもらい、自助、共助、公助をベースに公共的なものを考えるという考えを広めることが必要。また、これからは、受益者は応分の負担をする意識もないと。何でも公におんぶにだっこではいけない。

給与の削減について、一般職まで給与を一律カットするのは、経営手法としては下手なやり方。とにかく職場のモラルは落ちる。しかし、この際やむを得ない。やはり、県民の皆さんに痛みを分かちあってもらうには、これもやむを得ないのではないかな。

(委 員)

やはり、情報を公開し、県職員も県民も意識を共有することが大事。職員の意識改革もあるが、県民も変わらないといけない。そのためには、正しい情報の公開が大事。県政に無関心の方も相当いると思う。そういった方に県の状況を分かっただき、お金ではなく、知恵や手を差しのべてもらえる状況を作らないといけない。そのために、いろんな媒体を介し、いろんな情報を分かりやすく何度も繰り返し発信する。求められて提供するのではなく、積極的にどんどん開示する姿勢が求められる。

(会 長)

例えば「しゃべり場とくしま」も、人によっては陳情の場と捉えている場合もあると思うが、そうではなくて、提案型と言うか、相互コミュニケーションが機能しつつあるのではないかなと思う。知事はどうお考えか。

(知 事)

関心のある人は、情報をリサーチし、待っているんで、これは早い。肝心なのはあまり関心がない人。状況が進んで、例えば負担やサービスの低下として出たときに「えっ、これどういうこと」と言う人に事前にどう伝えるかが大きなポイント。

その意味で、「しゃべり場」は、地域住民代表や年代代表の皆さんをパネラーに迎え、フロアの皆さんにも「自分も言ってみよう」と思ってもらえるような形でやっており、従来よりストレートに地域の課題が出てくる。例えば、あそこの道路10年やってるけどなかなか開通しないよ、といったことも大きな提言の一つ。

そうした意見への回答と同時に、もう一つのポイントが、ケーブルテレビやインターネットでの放映。例えば意見を言った方が自分で見ると、あるいは身内や知人が見る中で、陳情もいいけどもっと積極的に意見を出したらどう、となり、次に友人の方が出られた時に提言に変わる。5年やってくると、この地域をこうしたい、他所でやってるこんなことを徳島でもできないか、といった提言が出てきている。これがまたテレビやインターネットで流れ、いい方向へどんどん回る。単に情報公開というより、双方向で県と県民の皆さんとが状況を共有し、苦しい時はお互いに苦労し、仲間意識を持って新しい未来を切り拓き、その成果もまた共有すべき。その意味で今、一番苦しく大変な部分を隠さずに出し、その

処方箋も幾つか提示して、フィードバックみたいな形で進めたらいいのではと思っている。

(委 員)

この財政問題は、今の状況ではやむを得ないとも感じる。ただ、職員が真剣にやる気を起こすことも大事。やる気を削ぐような財政改革は、マイナス要素になる。できる限り職員が理解し、本当にやる気を起こす改革をやっていただければありがたい。

(委 員)

県民の立場に立つという点は非常に嬉しい。今、行政と一般県民との間には大分隔たりがあるように感じる。弱者は本当に自分の生活に精一杯で、いろんな情報を聞くにも、その耳さえ持てない人もたくさんいる。

災害ボランティアは浸透してきたが、ボランティアと地域で共生するというにはまだ遠い。もう少しPRして、「こういうことにお困りならこんなボランティアがあります」、「ここに行けば間に合います」といった情報もしっかりいただきたい。

(委 員)

三位一体改革全体では、税源も3兆円来てバランスが取れていると思っていたが、具体的な数字で見るとその影響の凄さを感じる。それに対し、こうした形で自助努力するのは極めて立派で潔く、同感する。ただ、工夫を凝らし、人件費削減も一律ではなくメリハリも必要。適材適所の配置という内容もあり、そういう中で実現するのかなと思う。

一方、この厳しい状況を果たして自助努力だけで切り抜けられるのか。知事も再三強調している「ふるさと納税」のような考えを取り入れざるを得ない。大都市がますます富み、地方がますます窮乏する中で地域経済も苦しい。財政と地域経済は表裏一体で、水平調整的な枠組みを考えないと突破口がない。その意味で、知事がふるさと納税をPRしているのは心強い。一部には、税の専門的な立場から疑問の声もあるようだが、技術的にはさておき、中央が全部取り上げて思い通りに配分するのではなく、個人なり地域がもう少し裁量権を持つ枠組みについて地方から声をあげるという考えはいい。ただ、地方がよこせ、都会が俺の財布に手を突っ込むなでは、喧嘩以上のものにならない。これだけ自助努力し、やることはやった上で全体の枠組みを考えてほしいとなれば説得力もある。内容はこれでいい。もう少しアピールし、あらゆる手段を使ってPRしていただきたい。

(会 長)

徳島県は、悪いことは何一つしていない。私は、比較的早い頃からこの行財政改革の委員に入っており、最初は5年で100人だったか職員を減らすということだったが、当時の意識として、果たしてそんなことできるのかという状況から始まった。お金も、経済活性化のため、国から後で面倒は見るから事業をやれと言われ、徳島県は、率先してそれに協力した結果、非常に厳しい状況に置かれている。徳島県が言えば説得力がある。

(委 員)

私も小委員会で「人間らしい」について発言した。自然との関わりだけでなく、都会に

比べ徳島は中心部といろんな場所が近く、その余裕からくる人間らしさもある。徳島が、自分をしっかり見つめて生活できるゆとりの持てる土地だということがわかる文言に直していただけたらありがたい。

10年以上前に委員会に入れていただき、いろんなことを教わった。確かに財源やストックは枯渇したかもしれないが、人的な資源や能力にはこれまでの成果がある。それを活かしてこれから発展するという点を明確にしてはどうか。ただ赤字を減らすために努力するのではなく、生み出すものもある。

もう一つ、地方分権や地域、NPOといった民の力を活かす方向性は、江戸時代の幕藩制に通じる。幸か不幸か、幕府はそういう体制しかとれなかったのかも知れないが、町や村には自治の部分があって、例えば、親に捨てられた子は、全国どこでも里親が見つかるまで町や村全体で費用を負担して養育していた。この制度は、5代将軍綱吉が捨て子に科した厳罰に由来するという説もあるが、これは、施策が国から降りてきたときに、地域に受け皿、担い手があれば、それを実現できるということ。知事から、「しゃべり場」で地域から提言が出るようになったと聞き、担い手としての地域社会、公共社会が再生しつつあるのかもしれないと勇気づけられた。地域からの提言は、その地域だけでなく、県全体に広げて実現できればと思う。実は、6つの重点項目の「Ⅲ『公共空間の担い手』づくり」は、全体にかかる。この改革は、県だけが一生懸命やっても無理だと感じた。

(県)

本日欠席の委員から寄せられた意見をご紹介します。まず、〇〇委員からは、「県の行財政改革による事務事業や補助制度の見直しは、国が地方に対して行ったような自らを守るための単なる町村への負担転化とならないよう十分留意していただきたい。全国的に都市と地方の格差是正が問題となっているが、県内においても都市部と中山間部の格差の是正が課題となっており、小規模な町村に対する、メリハリをつけた積極的な支援や事業の展開をお願いしたい。県も財政状況が厳しいので、これまでのように全県下への画一的な支援は難しいと思われるので、自立可能な条件の都市部と条件不利地域への支援に差をつけるのはやむを得ない。むしろそうすることにより、県の国に対する主張と整合性が図れるのではないか。」との意見をいただいた。

また、□□委員からは、「高齢化の進展速度から、高齢者福祉分野における県の負担を少しでも抑制する方向に考えざるを得ない。高齢者単身世帯の増加、医師不足。限られた財源の中で、今後いかに地域の実情に即した医療や福祉を提供していくのかが大きな課題。県民、市民グループ、NPO等との連携・協働が新しい公共を築くポイント。県行政は、ナショナルミニマムの整備に徹し、多様化する地域のニーズには地域の力で対応、そのための協働の仕組みづくりを県が担当することが必要ではないか。例えば、地域協働事業の更なる拡大、県民協働ガイドラインの策定、協働参画を呼びかける情報発信窓口の整備、アドプト大国徳島の活動拡大など、アイデアと知恵を絞って改革を断行する必要がある。人材の宝庫である徳島の底力を発揮し、県民も痛みは覚悟の上で、とにかく今は改革に協力していかなければと痛感している。」との意見をいただいた。

(会 長)

小委員会の意見書案に「ピンチのときこそ最大のチャンス」とあるが、この対極にある言葉は、「貧すれば鈍す」。地方では、行政の持つ役割は大きく、縮小思考では際限なく縮んでしまうが、そうではない。かつては、なかなか思い切った改革ができなかったが、経済的に厳しい今、余分なものは削いでいくという意識が県民の中にでき、改革が進みつつある。いつか県の財政状況が上向くことも視野にいれておくべきだが、この機会に贅肉を減らして、したたかさとしなやかさを持つ必要がある。特にこういう時期でなければできないのは人材育成。「とくしま未来創造プラン」でも留意してもらいたい。

(県)

小委員会の意見書の採択にあたり、一部修正と追加をとという部分があった。委員長と相談の上、修正案を皆様に送らせていただくことで処理させていただきたい。

(会 長)

よろしいですね。委員長と事務局一任でお願いしたい。それ以外のことで、何か意見があれば。では、知事、お願いします。

(知 事)

特に、先ほど以降の意見について、大きく3点にまたがって話したい。

「人間らしい生活」の表現については、ただ「人間らしい生活」とだけ言うと、じゃあ都市部は人間らしくないのか、という話になってしまう。大都市から見ると、徳島での生活は憧れ。21世紀の目指すべき方向は、あくせくすることではなく、人間回帰や自然回帰、そうした調和の中でのスローライフ、ロハスであり、その格好の場として徳島は高いポテンシャルを持っているという表現をしていただければ、皆さんの意見が集約されるかと思う。いわば、20世紀物質至上主義の大都市生活へのアンチテーゼとしての人間らしい生活への回帰という風に言っていただくと、皆さんの疑念が晴れるのではないか。

2点目に財政問題としての水平調整。これは絶対必要。ふるさと納税・税制を巡り、東京、神奈川、愛知、大阪といった大都市部の知事が反対したが、大都市と地方が割れると国にそこを突かれるので、5県の若手知事で対案を出した。水平調整と垂直調整の両方をセットにしたということで、ポイントが2点ある。

一つは、大都市部としては税収全体が増えるなら文句は言わないとのことなので、地方税だけではなく所得税を含めた。それで東京の隣にいた茨城県の知事に、これだったらいいんじゃないか、と言ってもらえた。

もう一つは、税制のプロから非現実的だという話があり、確かに税制としては難しい。しかし、やはり21世紀。国が全て制度を決めるのではなく、皆さんが稼いだお金なので、税制も自分たちで納める地を決め、貢献する自由があってもいいということで、寄付金控除の仕組みをとった。今の日本の税制では、寄付金控除はたいてい所得控除だが、今回は税額控除、しかも前例のない100パーセントで事実上の税と同じ。この2点を今回提言した。少なくとも地方6団体はこれでまとまると思うが、今度は財務省が大反対となる。しかし、ここは国対地方、地方分権の時代として今後あるべき方向であり、大いに議論していきたい。委員の皆様にも、ぜひバックアップしていただければと考えている。

3点目に、地方分権時代を担う主役が誰か。この点もお話をいただいた。明治維新以来の日本は、常に中央集権で、富国強兵の明治・大正時代。そして、戦後昭和は復興のための強烈な中央集権。しかし、これが、やはりまずいとなり、バブル崩壊以降なかなか羅針盤が定まらなかったが、いよいよ昔の幕藩体制に舵を切った。最近何でも黒船が来たと言うが、まさに幕藩体制。20世紀の官民という区分けをシャッフルする必要がある。

例えば、お話にあった防災。従来は全部官が担ってきたが、自らの命は自らが助け、そして助けるなら向こう三軒両隣共助で自助、共助をしっかりと担っていただく。公助の部分は少ないと言い続けてきた。その結果、自治会なりのコミュニティが防災という切り口で復活してきた。自治会や、ボランティア、NPO、そして行政が一体となって、従来の官の世界を公という形で担う。まさにお話をいただいたとおりで、我々としても、そうしたところに仕事をどんどん受け持っていたいただきたい。

既に、NPO、ボランティアの皆さんには、我々の仕事のうち、ぜひこれはやってくださいとお出しするものと、逆にNPO、ボランティアの側から、これは我々でこそできるから任せてくれという両方の制度を進めている。もちろん、当然我々の財源を一部お渡しする形で、新しい担い手を作ると同時に、そこへの財政支援、さらには財政改革にもつながる一石二鳥ならぬ、三鳥、四鳥を目指そうと考えている。この点にも大変ありがたい提言をいただいたので、しっかり咀嚼し、これからの地方に求められる姿を徳島がリードしていきたい。今日は多くの提言をいただき、心から感謝申し上げたい。

(会 長)

各委員からの意見、それに対する県側のレスポンスもいただいた。予定の時間だが。

(委 員)

最後に、これを見てどちらの矢が長く見えるか考えてほしい。この矢は、本体の長さは一緒だが、矢羽のつけ方で全く違って見える。まさに県財政が厳しいとき、もとの長さは一緒でも矢羽のつけ方や角度の違いが効果を生み出す。ここにあるように、前例にとらわれず変革に挑戦する姿勢、コスト意識を徹底し、最小の経費で最大の効果を生み出そうとする姿勢を念頭に改革を進めていただきたい。

(会 長)

本日は有意義な会となった。事務局には、委員からの意見を真摯に受け止め、新プランの策定に取り組んでもらいたい。また、財政小委員会の意見書については、後は委員長と事務局に一任し、県に出してもらいたい。それでは、マイクを事務局に返したい。

(県)

今後は、まず、本日の骨子案を基にパブリックコメントを実施し、県民意見を募集する。そして、本日の議論とパブリックコメントを踏まえて新プランの成案を作成し、次回委員会にお示ししたい。本日は、長時間、熱心にご議論いただき、ありがとうございました。